

2024 年 8 月

食料安全保障月報

(第 38 号)



令和 6 年 8 月 30 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報(生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等)について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2024年8月食料安全保障月報（第38号）

目次

概要編

| | | |
|-----|---------------------------|---|
| I | 2024年8月の主な動き | 1 |
| II | 2024年8月の穀物等の国際価格の動向 | 5 |
| III | 2024/25年度の穀物需給（予測）のポイント | 5 |
| IV | 2024/25年度の油糧種子需給（予測）のポイント | 5 |
| V | 今月の注目情報「南米の穀物等の生産・輸出動向」 | 6 |

（資料）

| | | |
|---|-------------------------|-----|
| 1 | 穀物等の国際価格の動向 | 1 2 |
| 2 | 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移 | 1 3 |
| 3 | 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別） | 1 4 |
| 4 | 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況 | 1 6 |
| 5 | 食品小売価格の動向 | 2 0 |
| 6 | 海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供） | 2 1 |
| 7 | FAO 食料価格指数 | 2 3 |

今月のコラム

| | | |
|--|--------------------|-----|
| | 「米国ポートランドのレストラン事情」 | 2 4 |
|--|--------------------|-----|

品目別需給編

| | | |
|---|----------|----------------------------------------------|
| I | 穀物 | |
| 1 | 小麦 | 1 |
| | ＜米国＞ | 2024/25年度の生産量は下方修正され53.9百万トンの見込み |
| | ＜カナダ＞ | 2024/25年度の生産量は下方修正され34.4百万トンの見込み (AAFC) |
| | ＜豪州＞ | 2024/25年度の生産量は上方修正され30.0百万トンの見込み |
| | ＜EU27＞ | 2024/25年度の生産量は下方修正され127.8百万トンの見込み (欧州委員会) |
| | ＜ロシア＞ | 2024/25年度の輸出量は前年度より7.5百万トン減少 |
| | ＜ウクライナ＞ | 2024/25年度の生産量は上方修正され21.6百万トンの見込み |
| | ＜中国＞ | 2024/25年度の小麦の輸入量は前年度より1.6百万トン減少 |
| 2 | とうもろこし | 9 |
| | ＜米国＞ | 単収の引上げにより、生産量は1.2百万トン上方修正 |
| | ＜ブラジル＞ | 2024/25年度の見込みは4.1%増加の見込み |
| | ＜アルゼンチン＞ | 2024/25年度の見込みは、前年度から2.0%増加する見込み |
| | ＜ウクライナ＞ | 2024/25年度の見込みは、前年度より16.3%減の見込み |
| | ＜中国＞ | 2024/25年度の見込みは、前年度から1.1%増加する見込み |

| | |
|--------------------------------------------|---------------------------------------|
| 3 コメ | 15 |
| <タイ> | 2024/25年度の生産量は、前年度に比べ0.5%増加する見込み |
| <米国> | 2024/25年度の生産量は、前年度に比べ1.2%増加する見込み |
| <中国> | 2024/25年度の生産量は、前年度に比べ1.0%増加する見込み |
| <インド> | 2024/25年度の生産量は、前年度に比べ0.7%増加する見込み |
| <ベトナム> | 2023/24年度の生産量は、前年度に比べ1.9%減少する見込み |
| II 油糧種子 | |
| 大豆 | 21 |
| <米国> | 作付面積と単収の引上げにより、生産量は4.2百万トン上方修正 |
| <ブラジル> | 2024/25年度の生産量は前年度より10.5%増加する見込み |
| <カナダ> | 2024/25年度の生産量は前年度より1.7%増加する見込み (AAFC) |
| <中国> | 2024/25年度の生産量は、前年度より0.7%減少する見込み |
| <アルゼンチン> | 2024/25年度の生産量は、前年度より4.1%増加する見込み |
| (参考1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2024/25年度) | 27 |
| (参考2) 単位換算表 | 27 |
| (参考3) 各国のクロップカレンダー一覧 (主要品目毎) | 28 |

【利用上の注意】

表紙写真：米国のオレゴン州グリーン・バレー市の圃場。冬小麦の収穫作業が進捗している。(オレゴン州グリーン・バレー市 2024年7月31日)

(概要編)

I 2024年8月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の2024/25年度の作況について、北半球では小麦等が収穫期を迎えており、とうもろこしや大豆等の作物が生育期から成熟期を迎えている。なお、南半球では2023/24年度の作物の収穫がほぼ終了している。

2024/25年度の状況について、品目別にみると、8月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、ロシア及びEUで単収・収穫面積ともに前年度より減少するものの、米国及び豪州で単収・収穫面積ともに増加、インドで単収が増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022年3月に過去最高を更新した小麦の国際相場は侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナ産穀物の輸出再開に関する4者合意（黒海穀物イニシアティブ）については2023年7月にロシアが離脱し停止。現在、黒海の臨時回廊からの輸出が順調に機能しているものの、EUの東欧経由での輸出の進捗も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ブラジル及び南アフリカで単収・収穫面積ともに前年度より増加、中国で収穫面積が増加するものの、米国で収穫面積の減少、ウクライナで単収・収穫面積ともに減少すること等から、世界全体の生産量は前年度を下回る見通し。

大豆については、ブラジル及び米国で単収・収穫面積ともに増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。

いずれの品目も、旺盛な消費需要により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視が必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、主に穀物の価格の低下等により、6月の121.0から、7月（最新値）は120.8に下落（参考：2023年7月124.6、2022年7月140.6、2021年7月124.4、2020年7月93.9）。海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近5カ年の平均値と同程度の水準で推移。

早期注意段階の継続について

緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2021年7月に、主要輸入農産物の国際価格や海上運賃の上昇、国際的な物流の遅れ等の当時の状況を踏まえて適用。2024年8月も引き続き適用した一方で、主要穀物等の国際相場や海上運賃についてはここ最近下落傾向で推移しており、引き続きその動向に留意。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

USDA の 8 月需給報告によれば、2024/25 年度の小麦の生産量は、収穫面積は増加するものの単収が減少することから、前年度より 6%減少し 2,160 万トンとなる見込み。また、とうもろこしの生産量は、収穫面積・単収ともに減少することから、前年度より 16%減少し 2,720 万トンとなる見込み。2024/25 年度の小麦の輸出量は、生産量及び期首在庫の減少を受け、前年度より 24%減少し 1,400 万トンとなる見込み。とうもろこしの輸出量も前年度より 19%減少し 2,400 万トンとなる見込み。

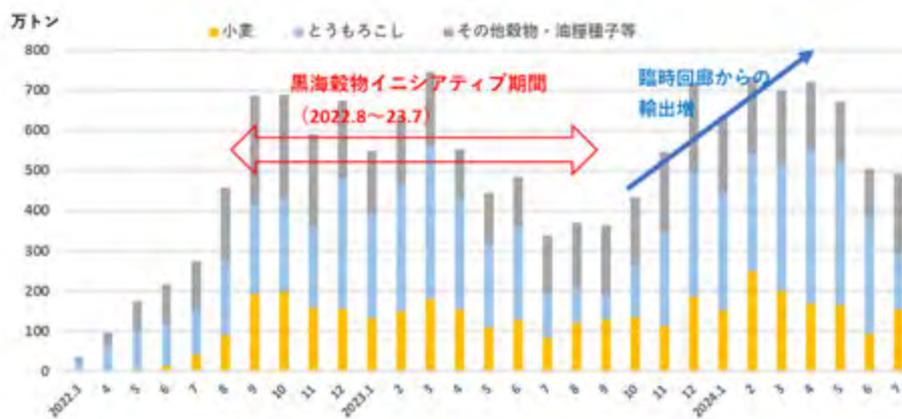
ウクライナ農業政策食料省によれば、8 月 8 日現在、2024 年度の冬小麦及び春小麦の収穫進捗率は 97.4%と収穫作業はほぼ終了した。ウクライナ気象センターによれば、7 月末現在、とうもろこしは主産地では概ね乳熟期にある。多くの地域で乾燥による立ち枯れや葉の黄変が発生している。

臨時回廊からの輸出状況

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、同年8月以降、オデーサ港等3港（オデーサ港、チョルノモルシク港、ピブジェヌイ港）からの輸出が再開したが、2023年7月17日にロシアが同イニシアティブからの離脱を表明し、輸出が停止した。ウクライナ農業政策食料省によれば、同イニシアティブ履行期間中の輸出実績（2022年8月～23年7月）は、穀物・油糧種子等6,846万トン（うち、小麦1,728万トン、とうもろこし2,949万トン）。

ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」を国際海事機関（IMO）に通報し、2023年8月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊や、運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。輸出ルートのうち、EU域内を経由した輸出（鉄道又はトラック）は減少傾向にある一方、臨時回廊からの輸出量が増加している。ウクライナ農業政策食料省によれば、2023年8月～24年7月までの穀物・油糧種子等の輸出量は6,888万トン（うち小麦1,859万トン、とうもろこし2,888万トン）と、黒海穀物イニシアティブ履行期間中の輸出量を超えた（参考）。

（参考）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022年3月～2024年7月）



出典：農業政策食料省のデータをもとに農林水産省で作成

注：データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計。

1 ウクライナ：高温乾燥によりとうもろこしの作柄が悪化

USDA によれば、2024/25 年度のウクライナのとうもろこしの生産量は、前月予測から 2% 下方修正され、前年度から 16% 減の 2,720 万トンとなる見込み。収穫面積は 410 万ヘクタールと、前月予測から 5% 上方修正されたものの、前年度より 2% 減少。単収は 6.63 トン/ヘクタールと、前月予測から 7% 下方修正され、前年度より 17% 減少した。

今月の単収の下方修正は、とうもろこしの生育初期以来、降雨不足が続いたことによる。7 月上旬から中旬にかけて続いた高温乾燥により、ウクライナの主要産地で土壌水分が大幅に不足し、開花期にあった作物の作柄が悪化した(図 1、図 2)。

なお、現在、臨時回廊により安定的な輸出が維持されており、2023/24 年度のとうもろこしの輸出量は、前年度より 9% 増加し 2,950 万トンとなる見込み。注目すべき輸出動向は、中国向け輸出が減少する一方、エジプト、トルコへの輸出が増加する見通しであり、インド向けに小ロットでの輸出が開始されるなど、輸出先国の多角化が進められていることである。

2 インド：国内需要増と輸出規制により穀物輸出が減少

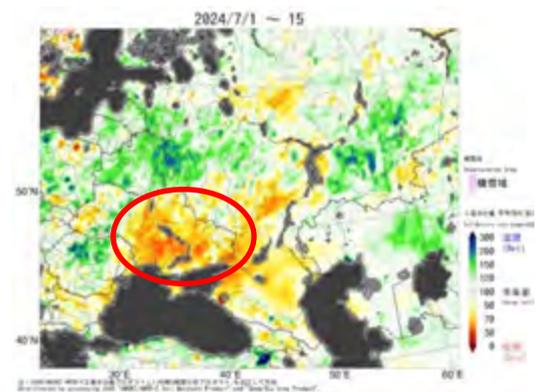
USDA によれば、近年、インドは旺盛な国内需要と政府の政策により、世界の穀物市場における主要供給国としてのプレゼンスが低下している。

とうもろこしについては、今世紀初めて純輸入国となる水準近くまで輸出量が減少している。これは、主に養鶏向け飼料用需要の急増と、政府のバイオエタノール生産の奨励政策によるエタノール用需要の増加による。

コメについては、インドは過去 10 年間、世界最大のコメ輸出国であったが、2022 年 9 月以降の政府によるコメ輸出規制（輸出禁止及び輸出税）により、輸出量が減少傾向にある。

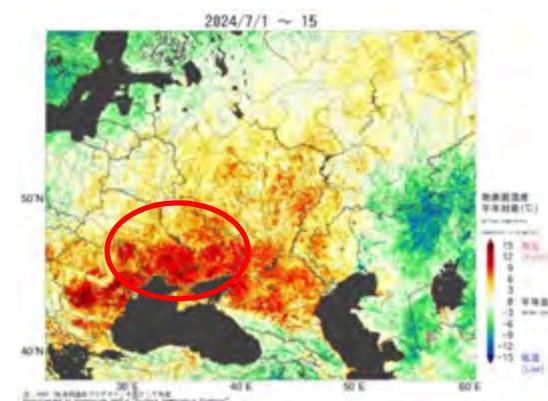
小麦については、2022 年 5 月に政府が小麦の輸出禁止を実施して以来、小麦の輸出はごくわずかとなっている。旺盛な国内需要に伴い、2023/24 年度の小麦の期末在庫量は過去 15 年で最低水準まで低下している。

図 1：ウクライナの土壌水分量(平年対差)
(2024. 7. 1~7. 15)



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム (JASMAI)

図 2：ウクライナの地表面温度(平年対差)
(2024. 7. 1~7. 15)



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム (JASMAI)

図 3：インドの穀物輸出量の推移



出典：USDA「PS&D」をもとに農林水産省にて作成

3 中東：紅海における船舶航行の安全確保が困難なため回避

イスラエルとハマスの戦闘が継続する中、報道等によれば、2023年12月以降、イエメンの親イラン武装組織フーシ派が、地中海とインド洋をスエズ運河経由で結ぶ紅海を航行する商船を攻撃しており、海運各社は貨物輸送をアフリカ喜望峰経由等に迂回させている。

また、パナマ運河については、2023年7月以降、降雨不足による水位低下に伴う通航制限が継続している。雨季の到来に伴い、水位は徐々に最適な水準に回復しつつあり、パナマ運河庁は、2024年7月11日より1日当たりの通航船舶を32隻から33隻、同22日より34隻、8月5日より35隻へと増加させている。

我が国の穀物輸入に関しては、小麦は主に米国・カナダ西海岸及び豪州から輸入しており、また、ブラジル産穀物等の多くは喜望峰経由で輸入していることから、上記2つのルートを通らない。

一方、米国産のとうもろこし及び大豆は、メキシコ湾（ガルフ）からパナマ運河経由で輸入している場合が多いが、パナマ運河の通行料の高止まり等の影響により、米国西海岸（PNW）や喜望峰経由に切り替えている例がみられる。喜望峰経由の場合、ガルフからパナマ運河経由で輸入する場合と比較して2週間から3週間程度日数が嵩む。引き続き、今後の動向について注視が必要である。



II 2024年8月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、7月末、190ドル/トン台前半で推移。8月に入り、EUの作柄懸念等を受けて190ドル/トン台後半まで上昇したものの、ロシア及びウクライナ産小麦との競争懸念等から下落し、8月中旬現在、190ドル/トン台半ばで推移。

とうもろこしは、7月末、150ドル/トン台前半で推移。8月に入り、米国の豊作見通しや市場予想を上回る作付面積を受けて下落し、8月中旬現在、140ドル/トン台半ばで推移。

コメは、7月末、610ドル/トン付近で推移。8月に入り、タイバーツ高にもかかわらず、引き続き新穀の出回りによるタイ国内価格の低下等から値を下げ、8月中旬現在、600ドル/トン台前後で推移。

大豆は、7月末、370ドル/トン台後半で推移。8月に入り、米国農務省需給報告において世界の生産量と在庫量が市場予想を上回ったこと等を受けて下落し、8月中旬現在、340ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、コメはタイ国家貿易委員会価格

III 2024/25年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より0.8%増の28.30億トン。消費量は、前年度より0.7%増の28.37億トンとなり、5年連続で生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率も前年度を下回り27.1%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前年度より、とうもろこしで減少も、小麦、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.30億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.37億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで減少し、穀物全体で減少し、4.99億トンの見込み。

期末在庫量は、7.70億トンと前年度より減少、期末在庫率も、前年度より減少する見込み。

(注：数値は8月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2024/25年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り6.91億トン。消費量は前年度を上回り6.64億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る22.7%となる見込み。

(注：数値は8月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」等による)

V 今月の注目情報: 南米の穀物等の生産・輸出動向

南米では2023/24年度のとうもろこし・大豆の収穫がほぼ終了し、小麦は2024/25年度の作付けが開始されている。2023/24年度は、エルニーニョ現象の影響を受け、ブラジル中西部では高温乾燥、南部では降雨過多となり減産となった一方、アルゼンチンでは、ラニーニャ現象の影響から60年に1度といわれる干ばつに見舞われた2022/23年度から回復し、増産となった。両国の2023/24年度の生産・輸出動向を振り返るとともに、2024/25年度の見通し等についてまとめた。

注：文中の「2024/25年度」等は市場年度で、ブラジル及びアルゼンチンの大豆は2024年10月から2025年9月、とうもろこしは2025年3月から2026年2月。国や作物によって異なる(品目別需給編 P.27 参照)。

1 ブラジルの生産・輸出動向

(1) とうもろこし

ブラジル食料供給公社 (CONAB) の月例報告によれば、2023/24年度のとうもろこしの生産量は、前年度に比べ12%減少し1億1,565万トンとなる見込み。

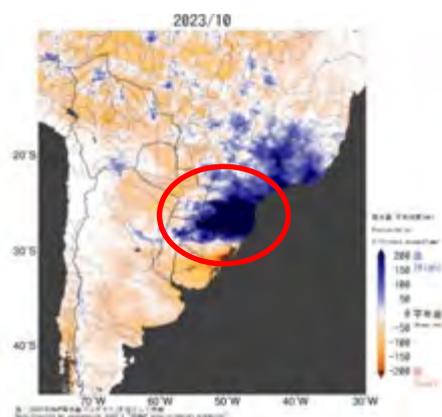
2023/24年度の夏とうもろこしの作付けは2023年9月に開始された。主産地の南部ではエルニーニョ現象の影響を受け多くの地域で作付期に降雨過多(図1)となり、土壌の浸食による栄養分の欠乏や発芽不良が生じた。生産量は、作付期の降雨過多及び日照不足による単収の低下に加え、とうもろこし価格の下落により収益の見込める大豆に作付けがシフトしたことから、前年度に比べ16%減少し2,296万トンとなる見込み。

2023/24年度の冬とうもろこしの作付けは2024年1月に開始された。エルニーニョ現象の影響を受けて主産地の中西部のマットグロッソ州、ゴイアス州では生育初期に高温乾燥に見舞われ(図2)、南部のマットグロッソ・ド・スール州、パラナ州では3~4月に高温乾燥に見舞われ作柄が悪化した。収穫作業は5月より開始されたが、州により気象条件が異なったことにより単収にバラつきが生じている。生産量は、高温乾燥による単収の低下に加え、大豆の作付作業の遅延により冬とうもろこしの作付適期が短縮されたことによる作付面積の減少から、前年度に比べ12%減少し9,269万トンとなる見込み。

USDAによれば、2024/25年度のとうもろこしの生産量は、国際的なとうもろこし生産量の増加や中国の景気低迷による国際需要の鈍化、ブラジルの貯蔵力不足等を受け、生産者はとうもろこしの作付けに慎重な姿勢をみせているものの、エルニーニョ現象の収束により、単収が改善すると見込まれることから、前年度に比べ4%増加し1億2,700万トンとなる見込み。なお、作付作業は2024年10

図1 南米の降水量(平年対差)(2023.10)

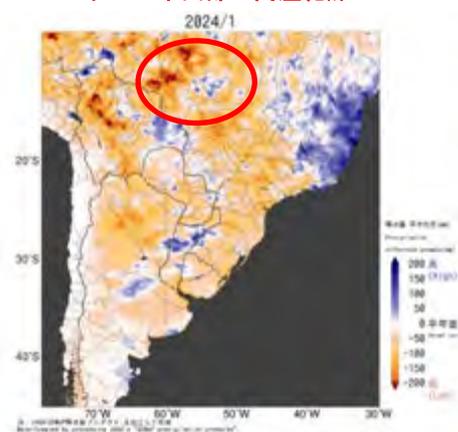
ブラジル南部で降雨過多



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム (JASMAI)

図2 南米の降水量(平年対差)(2024.1)

ブラジル中西部で高温乾燥



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム (JASMAI)

月以降に開始される見込み。

(2) 大豆

2023/24 年度の大豆の作付けは 2023 年 9 月に開始された。CONAB によれば、主産地のマットグロッソ州では高温乾燥により多くの地域で作付作業に遅れが生じ、一部の地域では作付けのやり直しが必要となった。遅植えの品種は、生育条件に恵まれ作柄は概ね良好となった。一方、ブラジル南部では降雨過多となり、土壌の浸食による栄養分の欠乏や発芽不良が生じた。また、南部のパラナ州では同年 12 月後半以降の高温乾燥により、開花期及び登熟期の大豆に深刻な被害が出た。リオ・グランデ・ド・スール州では、2024 年 4 月下旬から 5 月上旬にかけての降雨過多により州の生産地域の大部分で洪水が発生し（図 3）、同州農業技術普及公社（EMATER/RS）によれば、大豆圃場の約 149 万ヘクタール（総面積の 22%）が洪水被害を受け、271 万トン以上の損失（洪水前の生産量予測の 12%）が出たと推定している。

2023/24 年度の大豆の生産量は、エルニーニョ現象の影響により多くの生産地域で単収が低下したことから、前年度に比べ 5%減少し 1 億 4,738 万トンとなる見込み。

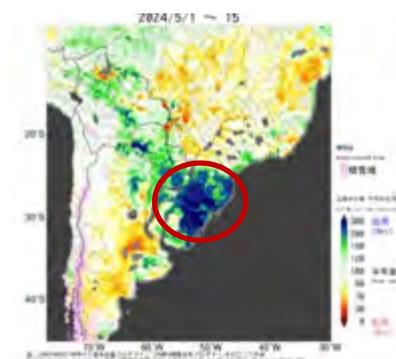
USDA によれば、2024/25 年度の大豆の生産量は、とうもろこし価格の下落により収益が見込める大豆に作付けがシフトすることや、前年度に深刻な影響を及ぼしたエルニーニョ現象の収束により単収が改善すると見込まれることから、前年度に比べ 10%増加し 1 億 6,900 万トンとなる見込み。

(3) 輸出動向

とうもろこしについて、ブラジルの主要輸出先は、中国、日本、ベトナムなどのアジア諸国、イランなどの中近東諸国、スペインなどの欧州諸国、アルジェリアなどのアフリカ諸国等、多岐にわたっている（図 4）。USDA によれば、ブラジルは 2022/23 年度に米国を抜き世界第 1 位の輸出国となった。これは、同年度に過去最高の豊作となったことに加え、主要なとうもろこし輸出国である米国やアルゼンチンが乾燥の影響を受け減産となったこと、2022 年 2 月のロシアのウクライナ侵攻を契機にそれまでウクライナからとうもろこしを輸入していた中東諸国等がブラジルからの輸入を増加させたこと、2022 年 11 月から、中国がブラジルからとうもろこし輸入を開始したことが要因であった。一転、2023/24 年度は、エルニーニョ現象の影響による減産に加え、米国やアルゼンチンの豊作を背景に国際市場での供給量が増加したことから、世界第 2 位の輸出国となる見込み。2024/25 年度

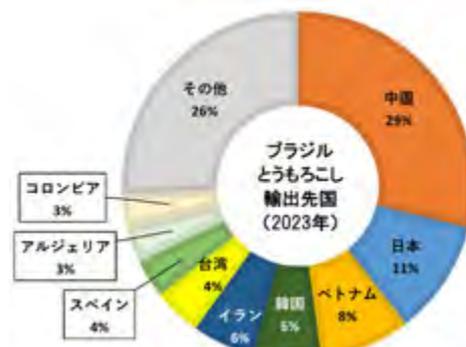
図 3 南米の土壌水分量(平年対差)(2024.5)

リオ・グランデ・ド・スール州で洪水発生



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAID）

図 4 ブラジルのとうもろこし輸出先国



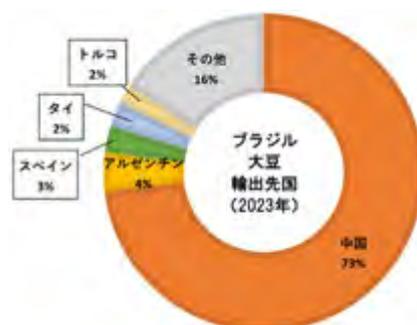
出典：Global Trade Atlas をもとに農林水産省で作成

図 5 とうもろこし輸出量の国別推移



出典：USDA「PS&D」をもとに農林水産省で作成

図 6 ブラジルの大豆輸出先国



出典：Global Trade Atlas をもとに農林水産省で作成

の輸出量は、ブラジルのバイオエタノール生産によりとうもろこしの国内需要の増加が予測されることから、前年度に比べ2%減少し4,900万トンとなる見込み(図5)。

大豆について、ブラジルの主要輸出先は、中国向けが大半を占めている(図6)。USDAによれば、ブラジルは2012/13年度以来、継続して世界第1位の輸出国である。2023/24年度は、生産量の減少にもかかわらず、高い価格競争力と中国向けの輸出増から、過去最高を記録する見込み。2024/25年度の輸出量は、エルニーニョ現象の収束により前年度に比べ生産量が増加することに加え、レアル安と中国からの引き続き堅調な需要から、前年度と同様の1億500万トンと過去最高を維持する見込み(図7)。

2 アルゼンチンの生産・輸出動向

(1) 小麦

アルゼンチン農牧漁業省(MAGyP)の月例報告によれば、2023/24年度の小麦の生産量は、前年度に比べ26%増加し1,590万トンの見込み。ラニーニャ現象の影響を受け60年に1度といわれる干ばつに見舞われた前年度からは大幅に回復したものの、過去8年間で2番目に低い水準となった。これは、生育初期に生産地の大部分で降雨不足に見舞われたため。

2024/25年度の小麦の作付作業は2024年5月から始まった。USDAによれば、2024/25年度の小麦の生産量は、前年度に比べ14%増加し1,800万トンとなる見込み。4月の降雨により土壌水分量が良好となり作付けに適した条件が確保された(図8)。これまでのところ、産地の大部分で作物の生育状況は良好である。

(2) とうもろこし

MAGyPによれば、2023/24年度の小麦の生産量は、干ばつに見舞われた前年度に比べ38%増加し5,730万トンの見込み。作付期の2023年9月の降雨不足(図9)により早植えとうもろこしの作付けは減少したものの、10月末から11月初めにかけての降雨により、遅植えとうもろこしの作付けが増加した。2024年1月末から2月初旬にかけて高温乾燥型の天候が続き、作柄の悪化が懸念されたが、2月上旬から3月にかけて主産地のほぼ全域で降雨が記録され、地域によりばらつきがみられるものの、作柄が改善した。2月以降、病害虫のヨコバイによる被害が発生し、遅植えとうもろこしの作柄が大幅に悪化した。特にアルゼンチン北部で深刻な被害が発生した。

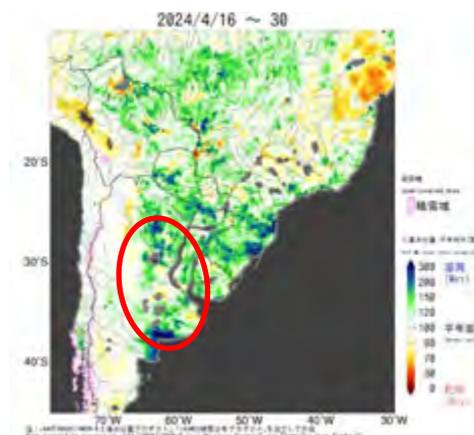
図7 大豆輸出量の国別推移



出典: USDA「PS&D」をもとに農林水産省で作成

図8 南米の土壌水分量(平年対差)(2024.4)

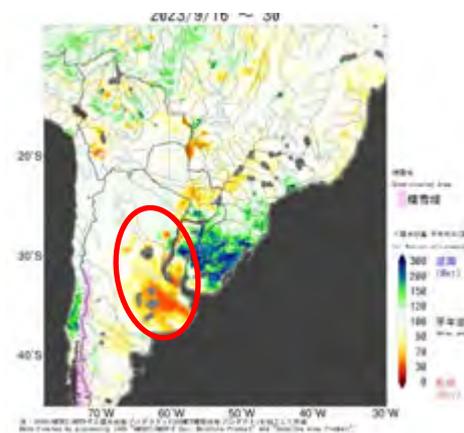
小麦作付期の土壌水分量は十分



出典: 農業気象情報衛星モニタリングシステム (JASMAI)

図9 南米の土壌水分量(平年対差)(2023.9)

早植えとうもろこし作付期の土壌水分量は不足



出典: 農業気象情報衛星モニタリングシステム (JASMAI)

USDAによれば、2024/25年度のとうもろこしの生産量は5,100万トンと、前年度に比べ2%微増する見込み。これは、ヨコバイによる被害が生産者の作付け意欲に負の影響を及ぼしているほか、とうもろこし価格の下落から収益が見込める大豆に作付けがシフトすることにより収穫面積が減少するものの、前年度に比べ単収が増加すると見込まれることによる。なお、2024/25年度の作付けは2024年8月下旬以降に開始される見込み。

(3) 大豆

MAGyPによれば、2023/24年度の実生産量は、干ばつとなった前年度に比べ96%増加し4,900万トンの見込み。1月末から2月初旬にかけて高温乾燥型の天候が続いたものの、その後の降雨により作柄が改善した(図10)。

USDAによれば、2024/25年度の実生産量は、とうもろこし価格の下落により収益が見込める大豆に作付けがシフトすることから、前年度に比べ4%増加し5,100万トンとなる見込み。なお、2024/25年度の作付けは2024年11月以降に開始される。

(4) 輸出税等の関連政策

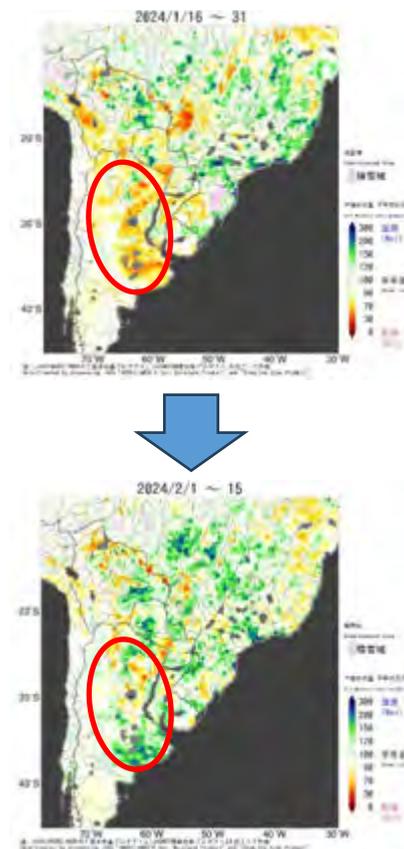
アルゼンチン政府は、従来から財政不足を補うため、農産物に対して輸出税を課しており、2024年7月現在、小麦・とうもろこしは12%、大豆は33%、大豆油・大豆粕は31%となっている。

また、アルゼンチンには、公式の為替レートである公定レートと、ブルーレートと呼ばれる非公式レートが存在する。2024年8月16日現在、公式レートが922ペソ/USD(購入)、非公式レートが1,315ペソ/USD(購入)となっており、公式レートと非公式レートで40%を超える為替ギャップが存在する(表)。これらの措置により、生産資材等の輸入時の為替レートとして非公式レートが適用されるため、輸入代金支払いの外貨取得が生産資材等の価格上昇を招く傾向にある。一方、農産物の輸出時の為替レートとして公式レートが適用されるため、ペソに交換された輸出代金は低く抑えられ、農業関係者の反発を招く傾向にある(アルゼンチンでは、輸出で得た外貨を全てペソに交換することを輸出業者に義務付けている)。

なお、とうもろこしや小麦については、国内供給を確保するために輸出上限数量が設定されていたが、2024年5月に撤廃された。

図10 南米の土壤水分量(平年対差)(2024.1)

1月末の高温乾燥も、その後の降雨により土壤水分量は潤沢に



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム (JASMAI)

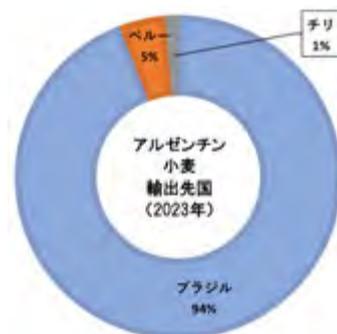
表 アルゼンチンの為替レート一覧

| 非公式レート | 公式レート | 銀行レート |
|--------|-------|-------|
| 1,315 | 922 | 941 |

購入レート：米ドルでアルゼンチンペソを購入(2024年8月16日現在)

出典：<https://bluedollar.net/>

図11 アルゼンチンの小麦輸出先国



出典：Global Trade Atlas をもとに農林水産省で作成

(5) 輸出動向

小麦について、アルゼンチンの主要輸出先は、ブラジル向けが大半を占める（図 11）。USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、干ばつとなった前年度から大きく回復し、124%増の 820 万トンとなる見込み。2024/25 年度の輸出量は、期首在庫量と生産量の増加により供給量の増加が見込まれるため、前年度から 40%増加し 1,150 万トンとなる見込み。

とうもろこしについて、アルゼンチンの主要輸出先は、ベトナム、マレーシア、韓国などのアジア諸国、ペルー、チリなどの中南米諸国、アルジェリアなどのアフリカ諸国、エジプト、サウジアラビアなどの中近東諸国等、多岐にわたっている。USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、干ばつとなった前年度から回復し、39%増の 3,500 万トンとなる見込み。2024/25 年度の輸出量は、生産量の増加と期首在庫量の増加が見込まれるため、前年度から 3%増加し 3,600 万トンとなる見込み。

大豆について、USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、大豆油と大豆粕の輸出増に伴い、前年度より 20%減少し 450 万トンとなる見込み。アルゼンチンは、付加価値のついた大豆油や大豆粕の輸出が主流となっており、丸大豆の輸出量は少ない。現地輸出業者によれば、現在、ペソ安が進行する中、生産者は 2023/24 年度の生産量の 73%に相当する大豆を現物で保有しているという。資本取引規制による公式レートと非公式レートの乖離も要因の 1つとみられている。なお、2024/25 年度の大豆油の輸出量は前年度から 15%増の 550 万トンとなる見込み。また、大豆粕の輸出量は、前年度から 12%増の 2,730 万トンとなる見込み。

3 今後の動向

2023/24 年度は、エルニーニョ現象の影響を受け、ブラジル中西部は高温乾燥、ブラジル南部は降雨過多となり、ブラジルにとって厳しい年となった。一方、アルゼンチンでは、60 年に 1 度といわれる干ばつに見舞われた 2022/23 年度から回復し大幅な増産となった。2024/25 年度の小麦の作付けは 5 月に開始された。とうもろこしについては 8 月以降、大豆については 11 月以降に開始される。USDA によれば、2024/25 年度の実生産量は、両国ともに、小麦、とうもろこし、大豆のいずれの作物も増加する見込みとなっている。

一方、北半球では、現在、2024/25 年度のとうもろこし、大豆の生育が進展しており、小麦は収穫期を迎えている。米国では、生育期間を通じて生育に適した天候に恵まれ、小麦、とうもろこし、大豆のいずれの作物も豊作となる見込み。他方、EU 西部では降雨過多、ロシア、ウクライナでは高温乾燥により作物の作柄が悪化し生産量は減少する見込み。地域によりばらつきはあるものの、2024/25 年度の世界の穀物及び大豆の生産量は史上最高を更新する見込みとなっている。

世界的に穀物及び大豆の生産量は潤沢であるとの見方から、2024 年 8 月 16 日現在の穀物等の国際価格は 2020 年の水準まで低下している。しかしながら、ウクライナ情勢や中東情勢な

図 12 小麦輸出量の国別推移



出典：USDA「PS&D」をもとに農林水産省で作成

図 13 アルゼンチンのとうもろこし輸出先国



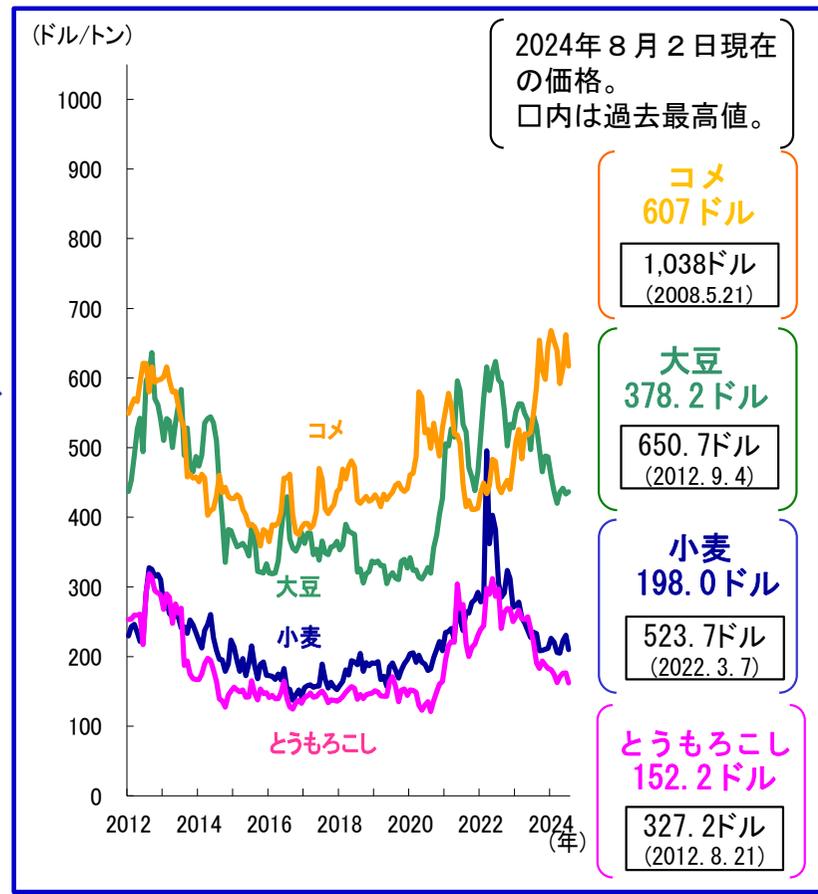
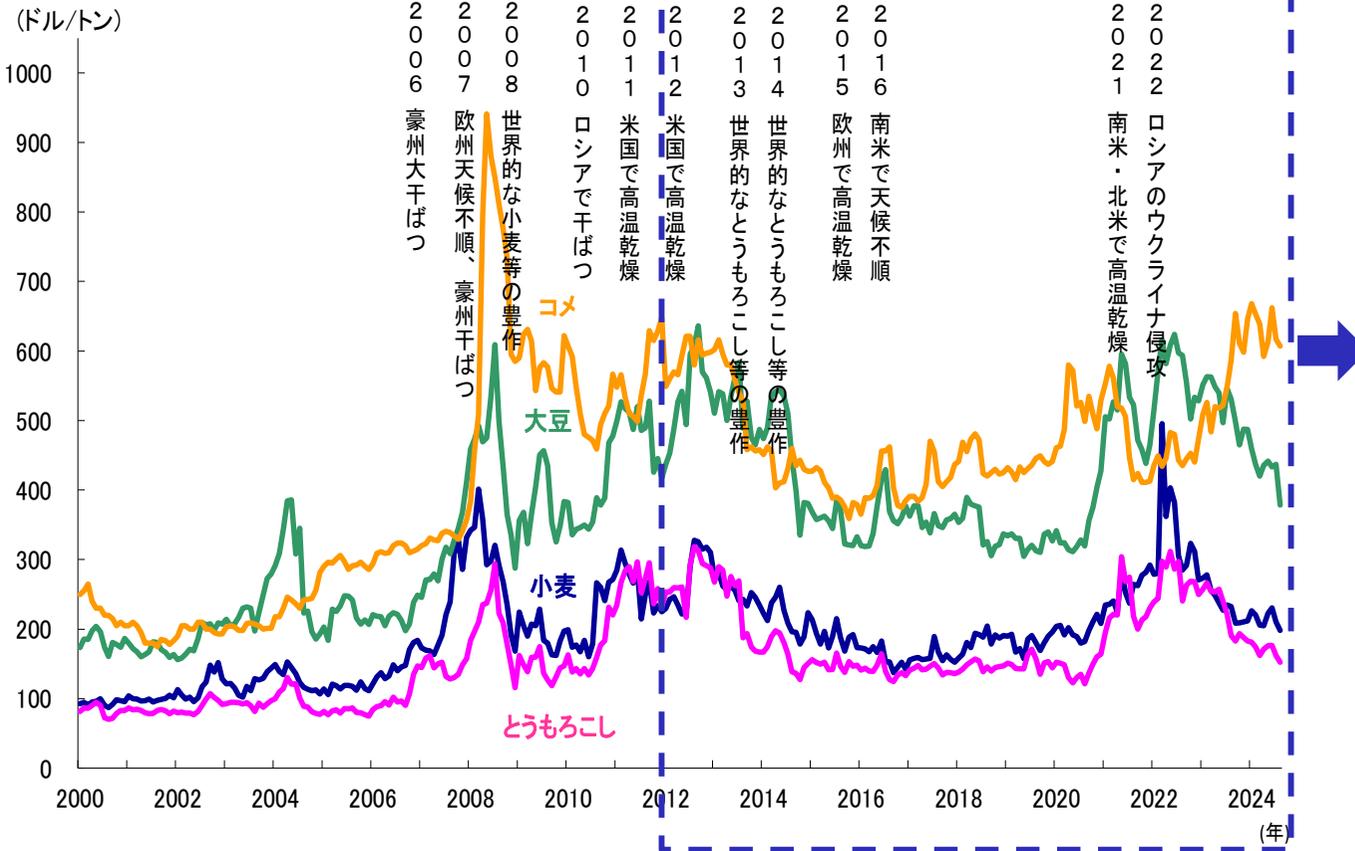
出典：Global Trade Atlasをもとに農林水産省で作成

どの地政学リスクは継続しており、また、ラニーニャ現象の発生による気象の変化にも注意が必要である。引き続き南米における生産・輸出動向を含め、世界の穀物需給の動向を注視していきたい。

資料 1 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、ウクライナからの臨時回廊等による輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時に高騰も、ブラジル等の豊作から侵攻前の水準まで低下。コメは、2013年以降低下で推移も、2022年9月以降、インドの輸出規制導入と強化、インドネシアのエルニーニョによる減産を受けた需要増等から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向

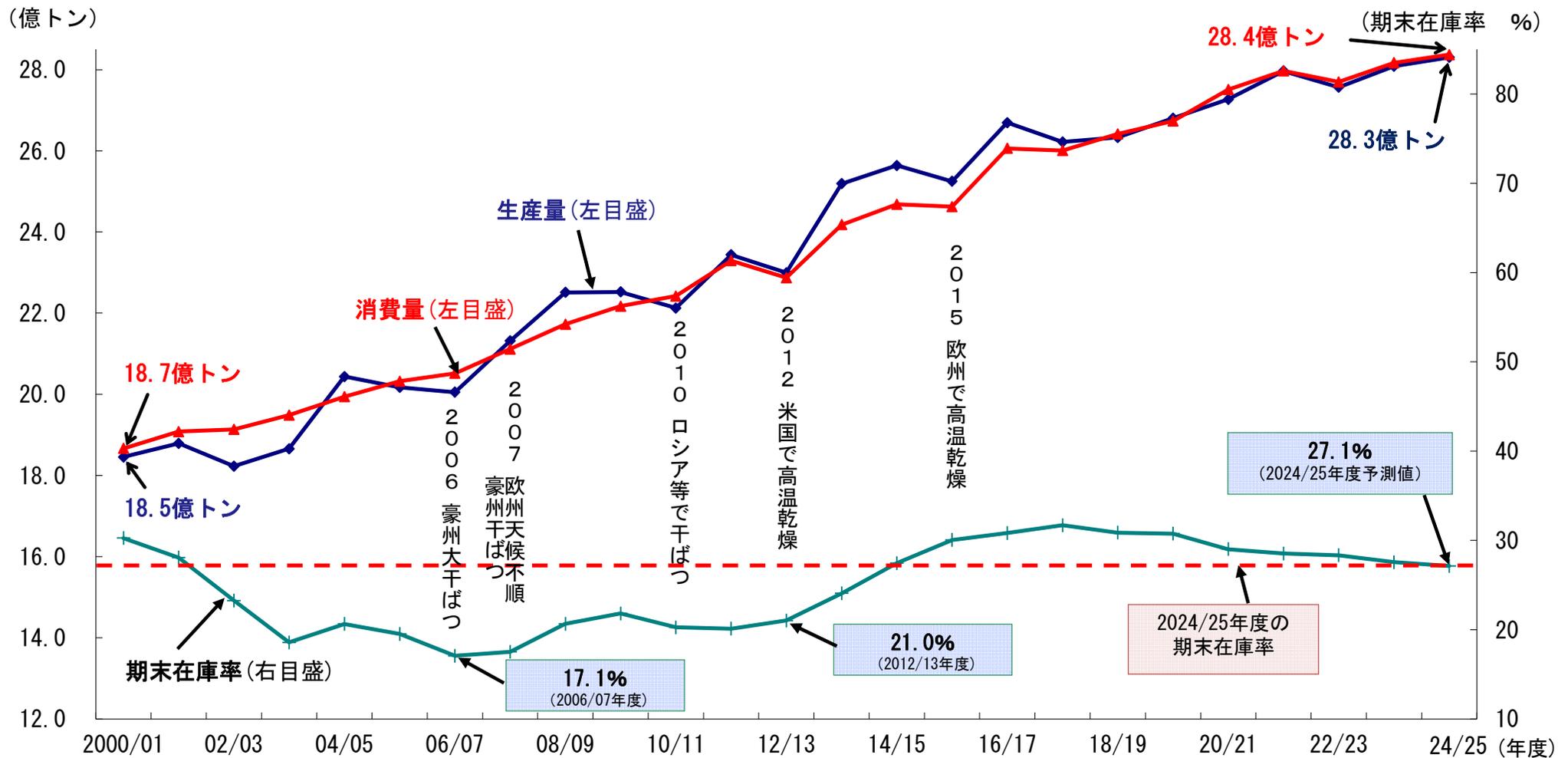


注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。
 なお、コメ価格は7月31日の価格。
 注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2024/25年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2024/25年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、27.1%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

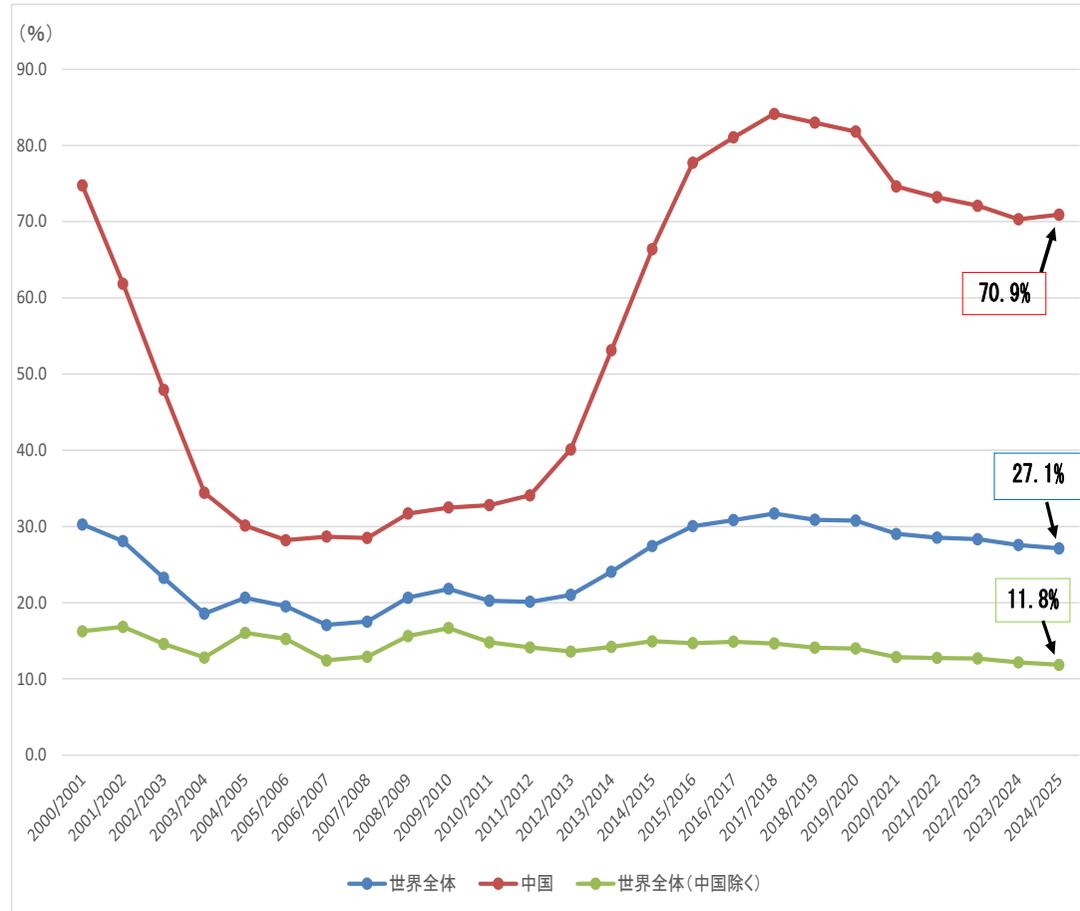


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(August 2024)、「PS&D」

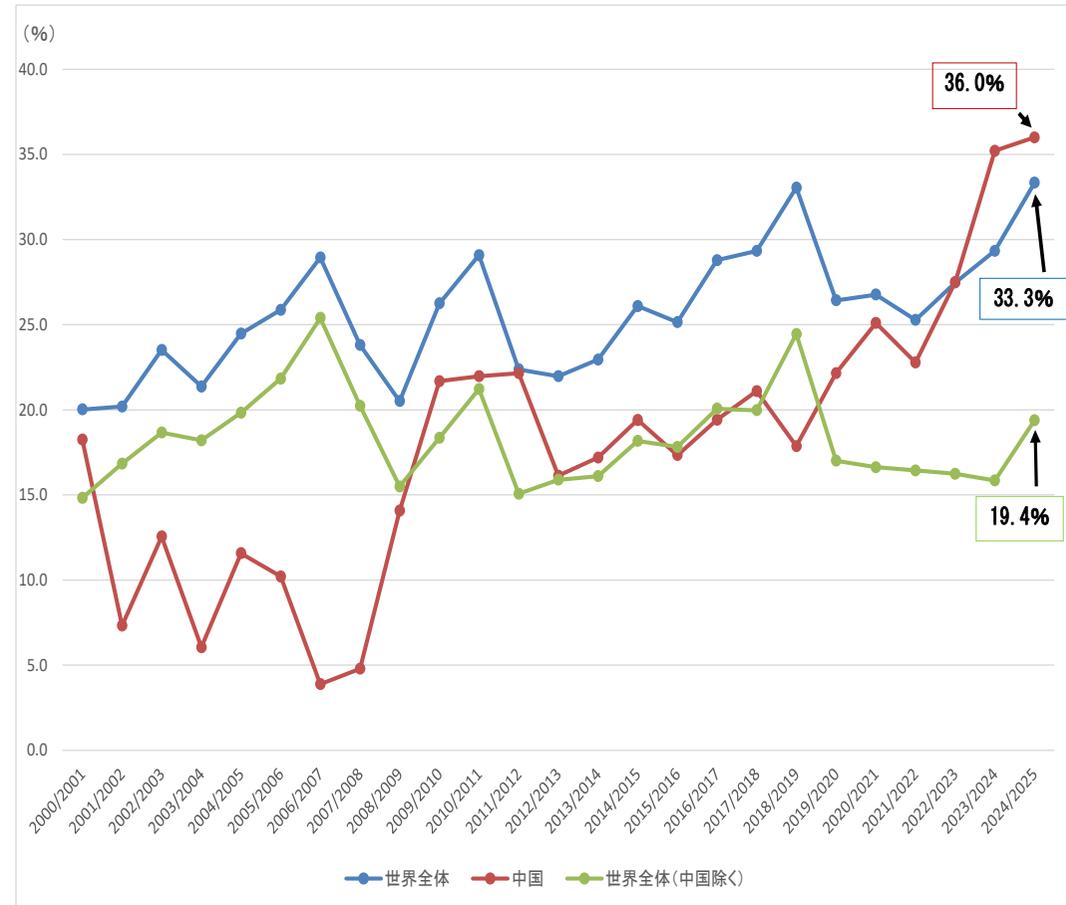
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(August 12, 2024)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

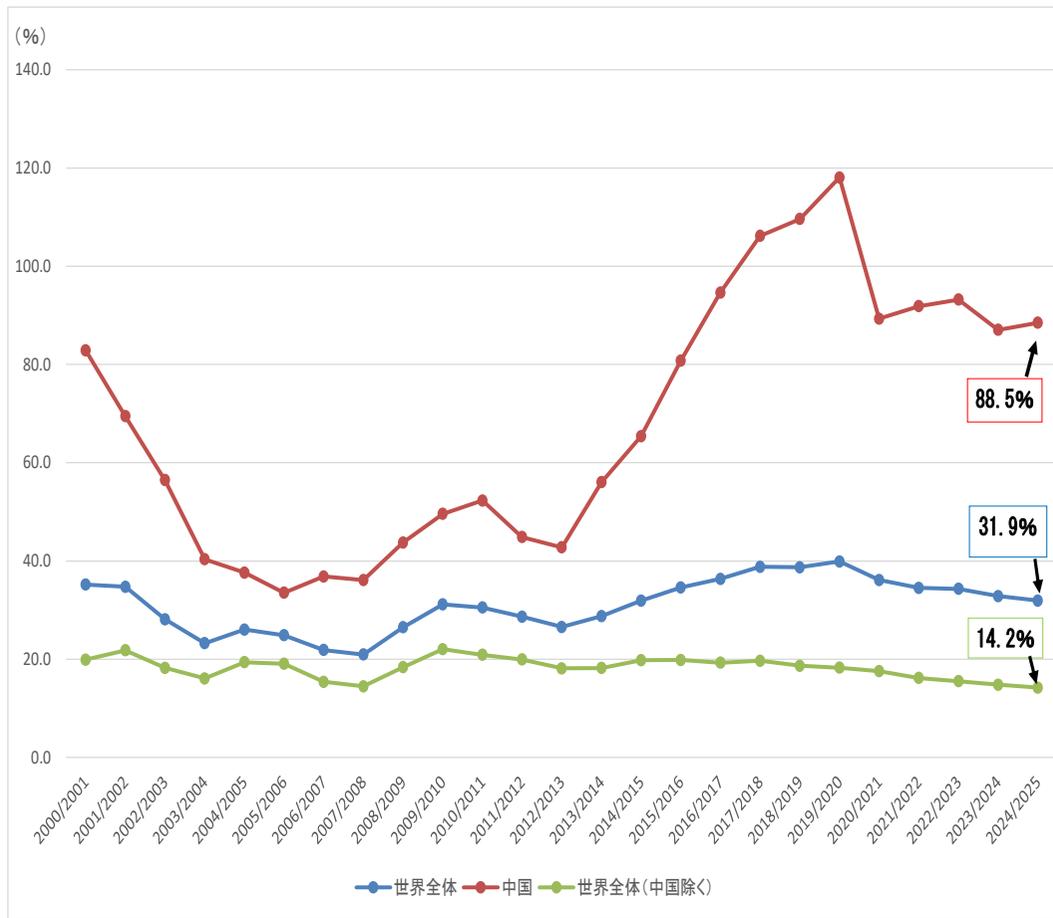
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

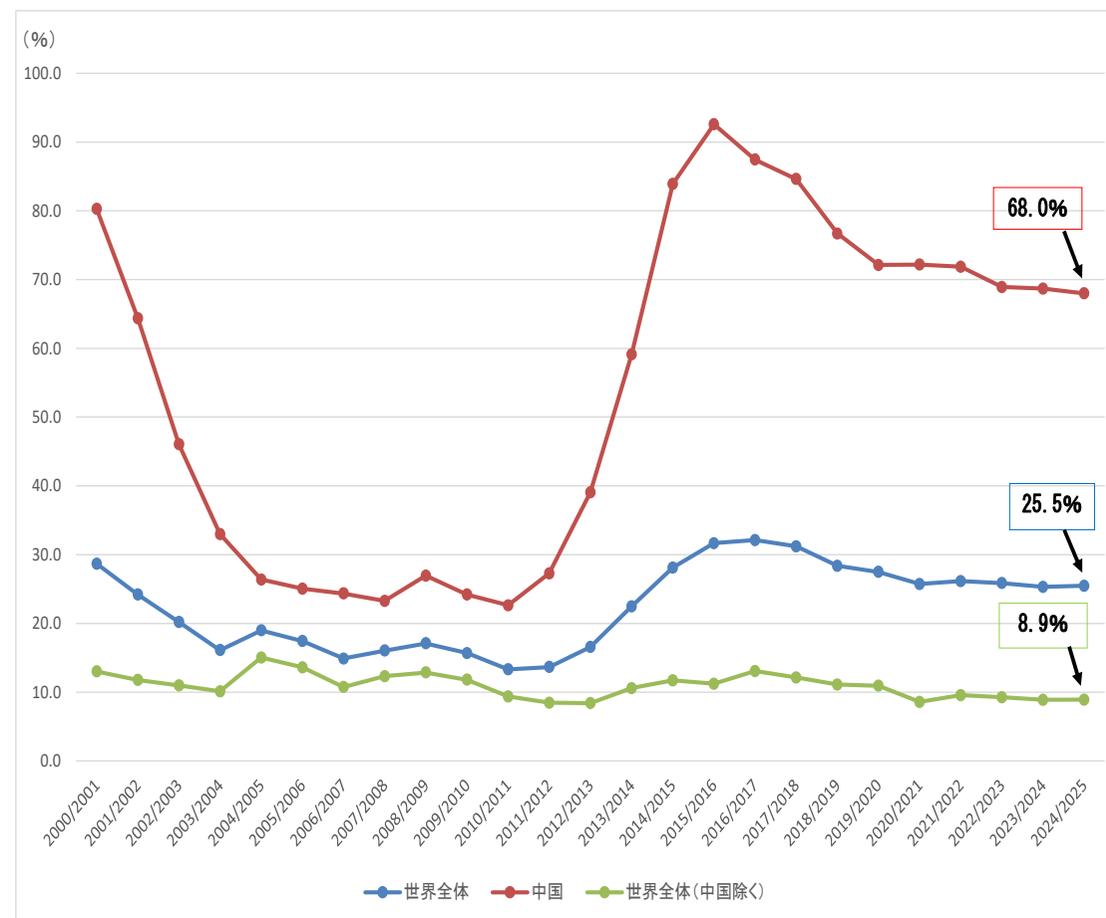
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(August 12, 2024)

注：1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

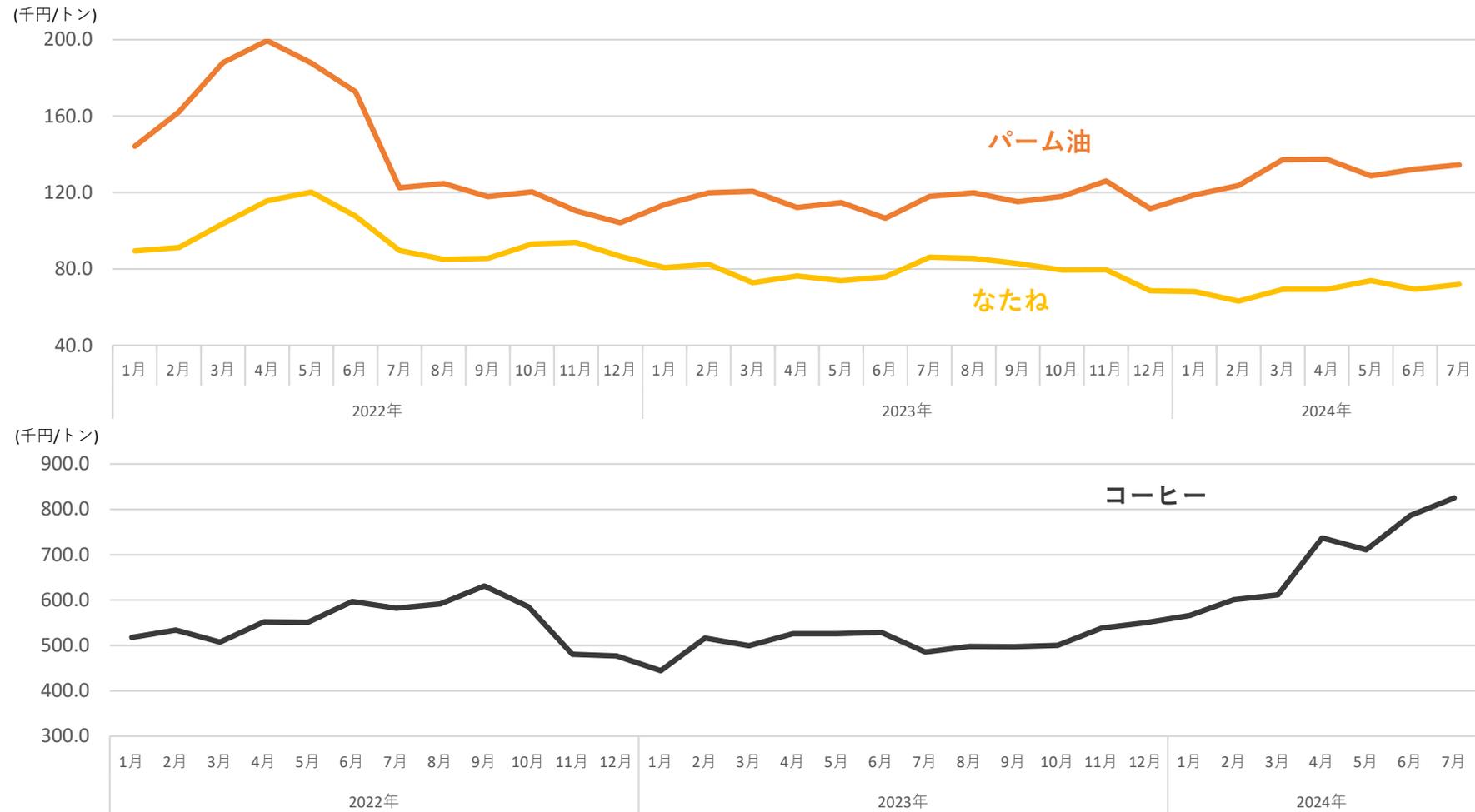
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料4-1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油の需要の面では、世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などにより市場価格上昇の要因となっている。
- なたね、パーム油の供給の面では、なたねについては、2021年に主産地であるカナダで減産があったが、2022年以降は回復基調から平年並みの収量に近づいた。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置（2022年5月23日解除）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも2022年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、2021年以降、世界最大の生産国であるブラジルにおける天候不順による収穫量減少や世界的な物流の混乱等により、市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルにおける収穫量の回復等により、市場価格は一時下降したが、ブラジルにおける天候不順やベトナムにおける干ばつによる収穫量減少等により、2024年以降は再び市場価格が高騰している。



2024年8月20日現在
□内は2022年1月以降の最高値。

パーム油
134.4千円/トン
199.5千円/トン (2022.4)

なたね
71.9千円/トン
120.3千円/トン (2022.5)

コーヒー
825.0千円/トン
825.0千円/トン (2024.7)

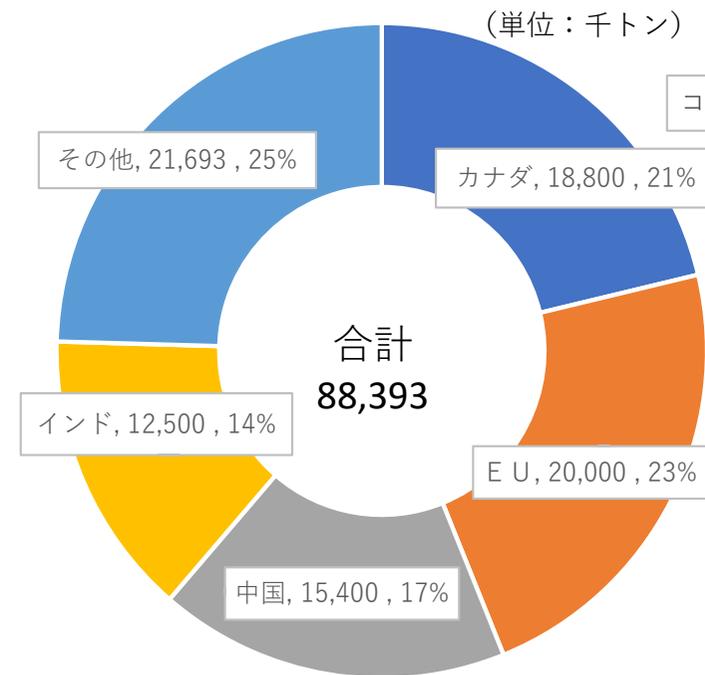
※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4 - 2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

○主要生産国の生産状況

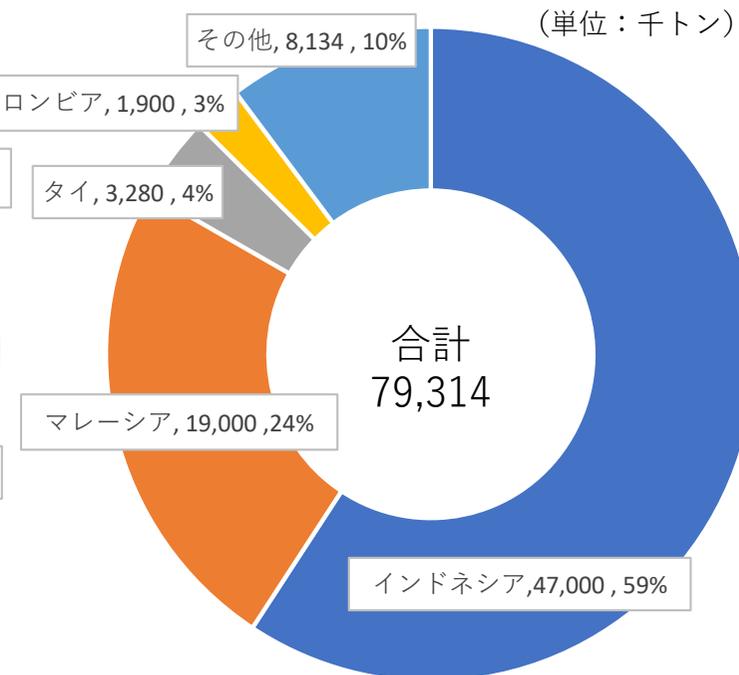
なたね生産量（2023/24）

（単位：千トン）



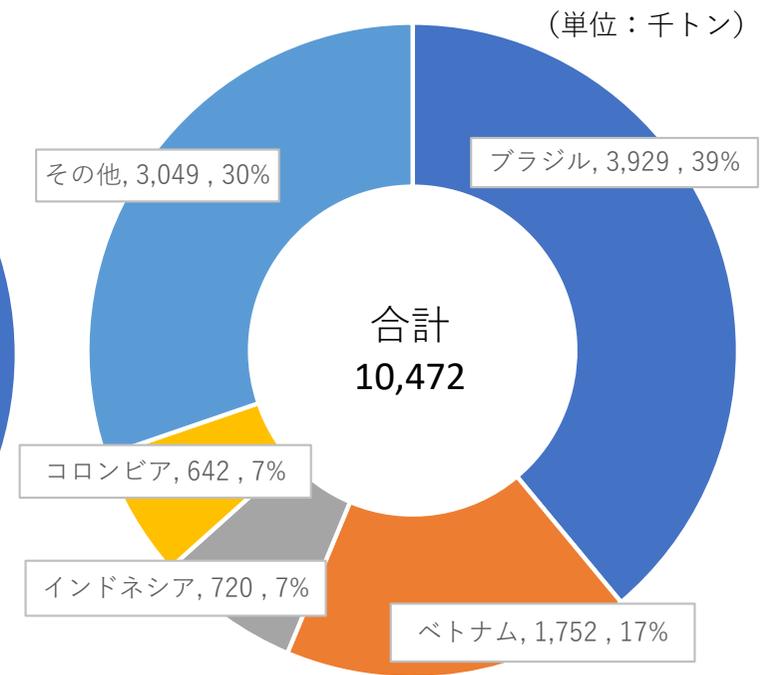
パーム油生産量（2023/24）

（単位：千トン）



コーヒー生産量（2022/23）

（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2024年6月時点

※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2024年6月時点

※国際コーヒー機関（ICO）統計資料
2024年6月時点

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2023年））

| なたね | 輸入量 | 割合 |
|-----------|--------------|---------------|
| カナダ | 1,039 | 51.4% |
| オーストラリア | 983 | 48.6% |
| その他 | 0 | 0.0% |
| 合計 | 2,022 | 100.0% |

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

| パーム油 | 輸入量 | 割合 |
|-----------|------------|---------------|
| マレーシア | 574 | 85.6% |
| インドネシア | 96 | 14.4% |
| その他 | 0 | 0.1% |
| 合計 | 671 | 100.0% |

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

| コーヒー | 輸入量 | 割合 |
|-----------|------------|---------------|
| ブラジル | 124 | 35.0% |
| ベトナム | 99 | 27.9% |
| コロンビア | 34 | 9.6% |
| その他 | 98 | 27.6% |
| 合計 | 356 | 100.0% |

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料4-4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

| | 2022年 | | | | | | | | | | | | 2023年 | | | | | | | | | | | | 2024年 | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|----|----|-----|-----|-----|--|--|
| | 1月 | 2月 | 3月 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | | |
| コーヒー | 517.9 | 534.1 | 507.5 | 552.1 | 551.2 | 596.8 | 582.3 | 591.6 | 631.1 | 585.4 | 480.6 | 477.0 | 444.4 | 516.3 | 499.6 | 526.2 | 526.1 | 529.1 | 485.5 | 498.1 | 497.4 | 500.3 | 538.5 | 550.2 | 566.3 | 601.1 | 611.7 | 737.0 | 710.8 | 786.3 | 825.0 | | | | | | | |
| 前月比 | 100.6 | 103.1 | 95.0 | 108.8 | 99.8 | 108.3 | 97.6 | 101.6 | 106.7 | 92.8 | 82.1 | 99.2 | 93.2 | 116.2 | 96.8 | 105.3 | 100.0 | 100.6 | 91.8 | 102.6 | 99.9 | 100.6 | 107.6 | 102.2 | 102.9 | 106.2 | 101.8 | 120.5 | 96.5 | 110.6 | 104.9 | | | | | | | |
| 前年同月比 | 194.1 | 190.6 | 172.9 | 188.0 | 169.5 | 172.9 | 158.3 | 152.4 | 151.4 | 128.4 | 98.8 | 92.7 | 85.8 | 96.7 | 98.5 | 95.3 | 95.4 | 88.7 | 83.4 | 84.2 | 78.8 | 85.5 | 112.0 | 115.4 | 127.4 | 116.4 | 122.4 | 140.1 | 135.1 | 148.6 | 169.9 | | | | | | | |

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

注2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和6年7月の国内の加工食品の消費者物価指数は113.4～152.7(前年同月比で-8.4%～6.5%)の範囲内。

消費者物価指数(総務省)
(令和6年2月～令和6年7月)

| 品目 | H30 | H31 (R元) | R2 | R3 | R4 | R5 | R6 | | | | | | 上昇率 (前年 同月比) |
|-----------------|-------|-------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------------------|
| | 平均 | 平均 | 平均 | 平均 | 平均 | 平均 | 2月 | 3月 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | |
| 食パン | 100.2 | 101.1 | 100.0 | 99.2 | 110.3 | 118.7 | 121.8 | 122.1 | 121.9 | 121.7 | 122.0 | 122.4 | 0.9% |
| 即席めん | 95.3 | 98.5 | 100.0 | 100.1 | 107.6 | 119.7 | 125.2 | 123.9 | 123.5 | 124.6 | 121.4 | 122.9 | -2.1% |
| 豆腐 | 98.8 | 99.1 | 100.0 | 101.3 | 105.3 | 114.6 | 117.5 | 117.6 | 118.0 | 117.9 | 117.9 | 118.1 | 2.6% |
| 食用油 (キャノーラ油) | 101.5 | 100.9 | 100.0 | 106.9 | 144.4 | 160.2 | 151.3 | 148.3 | 148.0 | 147.8 | 149.0 | 146.8 | -8.4% |
| みそ | 97.4 | 99.1 | 100.0 | 99.3 | 101.3 | 108.1 | 112.6 | 112.9 | 113.3 | 113.2 | 113.8 | 113.4 | 5.0% |
| マヨネーズ | 100.8 | 100.7 | 100.0 | 105.6 | 125.6 | 149.5 | 154.2 | 153.4 | 153.7 | 153.4 | 152.3 | 152.7 | -0.8% |
| チーズ | 100.9 | 101.3 | 100.0 | 98.7 | 107.5 | 131.1 | 132.7 | 134.5 | 135.3 | 130.5 | 132.6 | 132.3 | -1.8% |
| バター | 99.5 | 99.9 | 100.0 | 99.9 | 99.2 | 108.6 | 119.1 | 118.8 | 120.2 | 120.5 | 120.0 | 119.6 | 6.5% |
| 生鮮食品を 除く食料 | 97.9 | 99.0 | 100.0 | 100.2 | 104.1 | 112.6 | 115.1 | 115.3 | 115.5 | 115.7 | 115.9 | 116.3 | 2.6% |

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

資料: 総務省消費者物価指数

【参考】

食品価格動向調査(農林水産省)
(令和6年2月～令和6年8月)

| 品目 | H30 | H31 (R元) | R2 | R3 | R4 | R5 | R6 | | | | | | 8月 | 上昇率 (前月比) | 上昇率 (前年 同月比) |
|-----------------|-------|-------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------------|--------------------|
| | 平均 | 平均 | 平均 | 平均 | 平均 | 平均 | 2月 | 3月 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | | | |
| 食パン | 97.9 | 101.3 | 100.0 | 98.6 | 107.8 | 114.5 | 117.4 | 118.6 | 115.0 | 117.8 | 118.9 | 118.2 | 118.6 | 0.3% | 1.5% |
| 即席めん | 92.4 | 97.9 | 100.0 | 99.2 | 105.6 | 117.5 | 121.0 | 121.0 | 117.3 | 119.8 | 114.9 | 121.0 | 120.4 | -0.5% | -1.5% |
| 豆腐 | 100.1 | 100.9 | 100.0 | 100.6 | 103.7 | 113.0 | 114.6 | 115.0 | 118.9 | 116.7 | 115.0 | 115.9 | 115.9 | 0.0% | 1.1% |
| 食用油 (キャノーラ油) | 97.9 | 103.5 | 100.0 | 104.1 | 140.7 | 159.4 | 151.4 | 150.5 | 145.1 | 145.1 | 144.1 | 142.9 | 145.1 | 1.5% | -10.7% |
| みそ | 96.6 | 100.4 | 100.0 | 99.2 | 100.1 | 105.9 | 110.4 | 110.2 | 106.7 | 108.1 | 109.2 | 110.0 | 109.8 | -0.2% | 4.8% |
| マヨネーズ | 97.9 | 103.1 | 100.0 | 102.2 | 117.7 | 139.8 | 144.4 | 143.4 | 140.3 | 138.6 | 141.3 | 140.3 | 140.6 | 0.2% | -2.6% |
| チーズ | 98.6 | 100.9 | 100.0 | 98.1 | 105.7 | 126.5 | 128.8 | 129.8 | 123.8 | 121.3 | 127.8 | 129.3 | 129.3 | 0.0% | -0.8% |
| バター | 99.0 | 99.5 | 100.0 | 99.8 | 99.1 | 108.0 | 118.5 | 118.5 | 119.7 | 119.4 | 119.7 | 119.7 | 119.7 | 0.0% | 7.5% |

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2024年9月号（8月26日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）24年5月の牛肉輸出量はわずかに減少、日本向けはかなり大きく増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003369.html

（EU）牛肉生産量は増加も枝肉価格は高値を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003370.html

（豪州）24年7月の成牛と畜頭数、旺盛な輸出需要を反映し高水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003371.html

（NZ）米国向け牛肉輸出が堅調、年度累計（10月～6月）は前年同期比17.5%増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003372.html

◆豚肉

（メキシコ）24年の豚肉生産量、輸入量はともに前年を上回る見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003373.html

（ブラジル）24年1～6月豚肉輸出、中国向けは減少もアジアや米州向けが増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003374.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）24年6月の生乳生産量は前年同月比1.0%減、価格は高値で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003375.html

（EU）24年7月のバター価格、在庫確保の動きから上昇を継続

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003376.html

（NZ）24/25年度シーズン開始、輸出振るわず乳価への影響懸念

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003377.html

（中国）生乳生産量の伸びは低下するも、乳価下落は止まらず

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003378.html

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）米国などの増産見込みを受けて期末在庫は高水準の見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003379.html

（世界：大豆）米国の生産減も輸出入量は変わらず、期末在庫はかなりの増加見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003380.html

（米国）作付面積の拡大に伴い生産量は上方修正、生産者販売価格は引き続き低迷

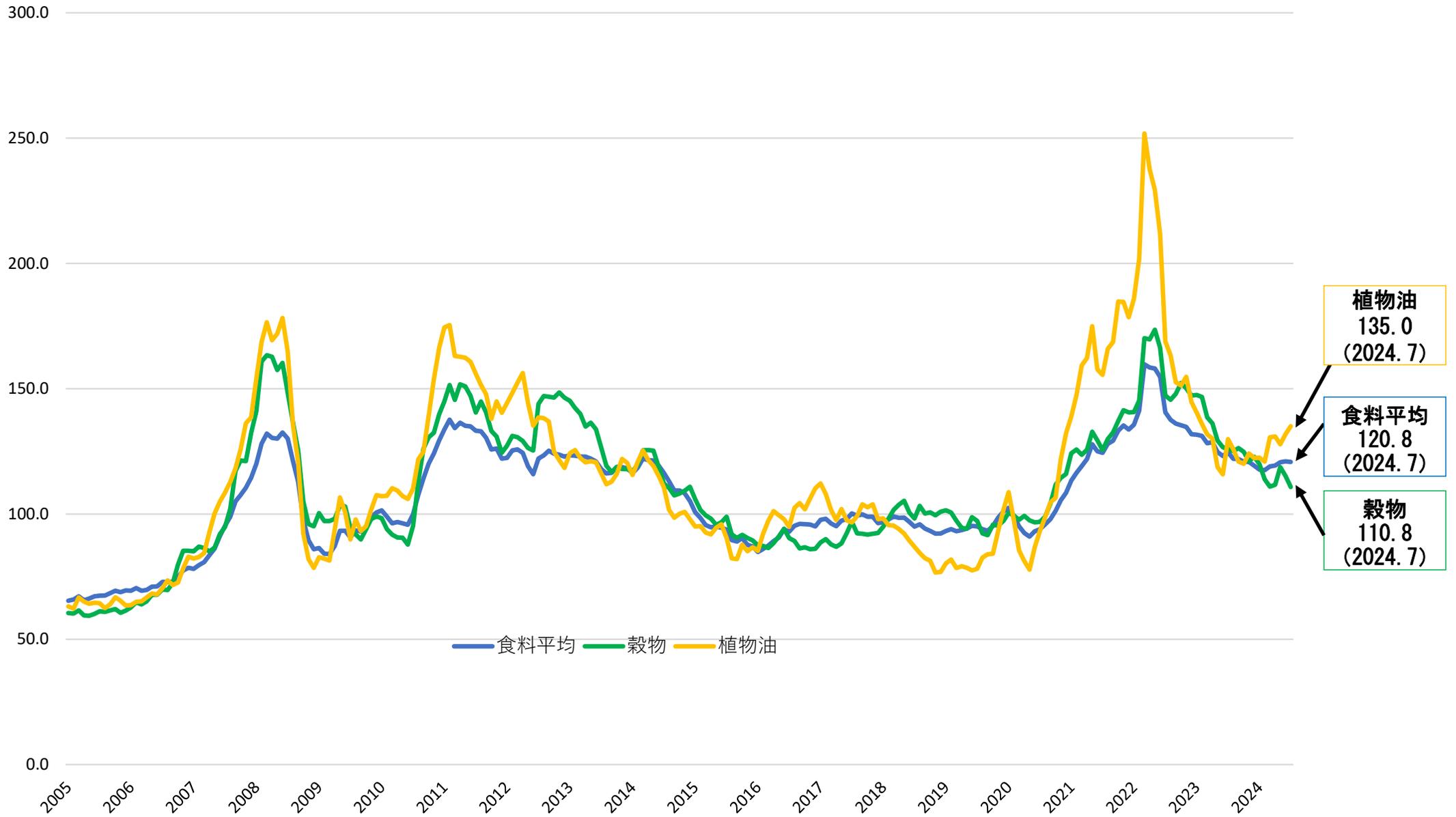
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003381.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003382.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2024.7)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】

米国ポートランドのレストラン事情

前回寄稿した「米国太平洋岸北西部（PNW）のビール事情」に続き、今回は「美食の街」とも言われるポートランドのレストラン事情の特徴についてご紹介したいと思います。皆さんはアメリカ料理と聞いて、大きなハンバーガーやサンドウィッチ^{※1}、分厚いステーキに大量のフライドポテト（マッシュポテト）、を想像するでしょうか。いわゆるアメリカ的な料理も確かに根強い人気がありますが、「Keep Portland Weird（ポートランドよ、変わり者であれ）」というスローガンの下、リベラルな空気が濃いポートランドでは、世界各地^{※2}のテイストを織り込んだフュージョン系アメリカ料理が人気を博しています。

※1 牛肉以外の肉を挟んだ場合にはハンバーガーでなくサンドウィッチと称します。

※2 ハイチ、ペルーといった中南米地域、日本、韓国、タイ、インドといったアジア地域、フランス、ギリシャ、トルコ、ロシアといった地中海・欧州地域など

例えば、ポートランド市東部の「KAAN」（カーン）というハイチ系フュージョンのレストランは2023年にJames Beard 財団^{※3}（ニューヨーク）のベスト新レストラン賞を受賞しています。このほかにも、ペルー系フュージョン、地元食材愛の強いアジア/イタリア系フュージョン、味わいに和テイストを感じるアメリカン・フュージョンなどの多くのレストランも人気となっています。これらのレストランに共通するのは、「地産地消、オーガニック、サステナブル、ゼロカーボン」など、食材調達から客に提供するまで、健康や環境への配慮するメッセージを前面に出している点です。（写真1）。

※3 レストラン業界の新しい基準を推進しながらアメリカの食文化を支える人々を支援する組織として、料理、食品メディア業界、及びより広範な食品システムのリーダー達を表彰する国内で最も名誉ある賞の一つです。

ポートランドでは1979年に「都市成長境界線（Urban Growth Boundary）」制度が導入されており（図1）、都市開発の範囲を境界線内に制限することで都市機能のコンパクト化推進と、境界線外側の自然や農地の保護に役立ててきました。クラフトビールでも感じたポートランド市民のローカル志向やレストランで感じるエコ志向の背景には、ポートランドが歩んできた歴史や街の近郊で生産される新鮮な農産物等を安定的に調達できる自然環境が寄与していると感じます。

もう1つ、ポートランドのレストラン風景に欠かせないのが「フードカート」と呼ばれる屋台です。いわゆるキッチンカーに似ていますが、フードカートにはエンジン等の動力がないため、トレーラー・レストランというべきでしょうか。フードカートはその起業のしやすさと「他にはないものを」というポートランド気質も相まって、現在では市内に600軒以上の様々なお店があると言われています。これらのお店は、市内各地の商店街の駐車場にあるポッド^{※4}と呼ばれる場所で営業されている場合が多いですが（写真2）、昔の精神病院跡地（アサイラム）をポッドに変えて営業している一風変わった場所もあります。

※4 5~10くらいの複数のカートが集まる屋外フードコートのような形態の営業スタイルです。

フードカートで提供されるのは、「洗練された華やかなプレート」というよりは、こちらでも「地元愛あふれる、世界各地のごはん」という料理です。前述のとおり、ポートランドはリベラルで多様性を受け入れる街だけあって、カートごとに変化に富んだ（塩味、ボリューム等）、美味しい味を楽しむことができます。また、数は少ないですが、日本人がお寿司を提供する店舗も人気です。皆さんも、チャンスがあれば是非ポートランドの空気とともに食シーンを体験してみてください。

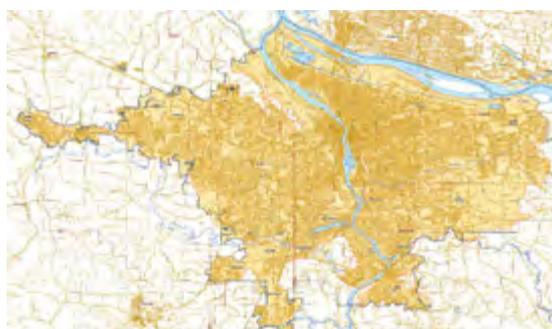
文責：重久直人（在ポートランド領事事務所 領事（経済・広報文化班担当））



(写真1) フェージョン系レストランの「片側寄せ」プレゼンテーション。写真左：Coquine（アメリカン/ジャパニーズ系）、同中：G-Love（アジア/イタリアン系）、同右：Canard（フランス系）



(写真2) ポートランド市内にあるポッド（アサイラム）の様子。
写真左：様々な種類のフードカートが並ぶ。写真中：カートで提供される料理（テキサス風メキシカン、辛い）、写真右：ゴミ箱もなかなか個性的（後ろには有刺鉄線の壁）。



(図1) Urban Growth Boundary
(2023. 8. 3)

【データ・出典】

Travel Portland -ポートランドのフードカート・ポッド：<https://www.travelportland.com/ja/cart-pods/>

James Beard Foundation：<https://www.jamesbeard.org/blog/the-2023-james-beard-award-winners>

野尻洋平・寺島拓幸・水原俊博 2019 「持続可能な消費都市ポートランドの現状と課題」名古屋学院大学論集社会科学篇 第56巻 第1号 P59-77

Metro：<https://www.oregonmetro.gov/urban-growth-boundary>

環境省、世界が注目するポートランドのまちづくり：

https://www.env.go.jp/policy/co2ta/content3/page2_1.html

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴や考え方、また、日本の食料品や文化等に対するイメージなどについてもご紹介したいと思います